



長城を行く 第七回

偏関



古来、黄沙は北風にのって中原に吹きだまり、これから訪れる山西・陝西省境の偏関や寧夏の大地にうず高く降りつもった。その厚さはもっとも高いところで150メートルにも達するというからすごい。

黄沙が堆積した一帯は黄土高原とよばれている。広さは40万平方キロを超え、日本の国土面積をかるく上まわってしまふ。そんな大地を大きく蛇行して流れているのが中国第二の大河、黄河である。

万里の長城が黄河と交叉して絶景をなす偏関という土地があるらしい。大回から1日に1本しかない列車に乗って、いま、そこへ向おうとしている。山西省南部と陝西省への分岐点になっている朔州という駅で鉄路は国営から民間セクターの管轄に変わる。とつぜ

ん私鉄になった列車に乗りつづけ、三岔という待合室もない小駅で降りた。大同から6時間ほどだ。ホームの端には数台の輪タクが待ち構えており、それに乗って数キロ先の集落まで行く。そこからミニバンで黄土高原の真つ只中をさらに2時間も疾走し、やっと目的地の偏関にたどり着いた。

偏関には窑洞という名の横穴式住居が、鼓楼を包囲するように広がっている。窑洞は風雨で浸食され、あるいは陥没した垂直の断崖にアーチ形の横穴をうがち、入り口に扉をつけた簡素な



▲窑洞の住居群

背後の黄土層をアーチ型にくりぬいた横穴式住居。内部は電気が通じ、柱がないので広く快適である。偏関の街のいたるところにみられる。

◀万家寨の吊橋

橋長は150メートルほどで、山西省万家寨と内蒙古自治区の鄂爾多斯をむすぶ。高度も高いので、大河の流れに吸い込まれそうな気分になる。



居住空間である。夏は涼しく、冬は暖かい。延安時代の毛沢東らが住居やオフィスに使ったことで世界に知られている。城壁を有し、鼓楼を核とする偏関が中国の他の郷鎮とその表情で一線を画すのは、この独特な横穴式住居が街をおおっているからだろう。

旅の荷物をおろした旅館も1泊10元（1元＝約16円）の洞穴だった。ひと休みして長城と黄河が交叉する絶景の地への足をさがす。タクシー運転手の説明によれば、そこは老牛湾というところらしい。往復4時間の遠方だというので、すぐに出発する。

老牛湾への行程は過酷だ。でこぼこ道をどこまでも北行する。やがて黄土層をくだる分かれ道に入り、小さなタクシーは悪路にもんどりを打ちそうになりながら100メートル以上も高度を下げた。すると断崖のむこうに青い水面が見え隠れしてくる。あれが黄河にちがいない。運転手が「老牛湾」とつぶやいて前方を指さした。

そそり立つ断崖の上に小さな平地があり、そこから老牛湾の絶景をながめる。ここは山西省と陝西省、そして内蒙古自治区が境を接する三角地なので、対岸はきつと内蒙古であろう。そこに

は黄土高原を這うようにくだつて黄河に入水する長城の遺跡がはつきりと認められる。大河を隔てたその先の絶壁の上には半壊した烽火台の遺構が、かつては韃靼人のホームグラウンドであった内蒙古の大地を睥睨している。長城と黄河、烽火台と役者のそろいすぎた雄景に圧倒され、しばし見とれる。

帰路は南流する黄河にそって万家寨まで進み、大河に架かる吊橋を徒歩で渡ってみた。対岸の人に「ここはどこですか」と聞けば、「鄂爾多ス」と答える。やはり内蒙古だったのだ。

黄昏のころ偏関に帰りついた。窑洞の住人たちが夕餉の支度にかかっている。鼓楼の周辺には屋台が店を開き、あちこちに団欒の花が咲きはじめた。粉食地域なので地元の人たちは米を喰わない。習慣に従い、ラー油の効いた牛肉麵を注文してあたりをながめると、女性ほどの顔も美しく、品がよい。夜目にきれいなのではなく、ほんとうに美人なのだ。そんな思いを見透かしたのか、隣りの客が「偏関は美人の郷ですよ」と誇らしげに話しかけてきた。

中村達雄（なむら たつお） ◆ラジオペキン、オリンピック、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在、明治大学非常勤講師。